

## 【特集】

〈第33回大会シンポジウム「高校の新学習指導要領をどのように考えるのか」〉

### 【シンポジウム関連論文】

## 能動的・協働的な授業方法をどのように学修するのか

### —教員養成での一実践—

藤野 敦\*

#### はじめに

2014年12月16日、筑波大学で開催された中等社会科教育学会大会シンポジウムにおいて、筆者は高等学校の科目における育成すべき資質や能力を考える題材として、日本史A、Bを中心とした他教科・科目との連携や、多様な資料を用いて生徒の協働的な活動をとまなう高等学校の実践について報告する機会をいただいた<sup>1)</sup>。報告後の協議等を通じて、多くの高等学校で能動的・協働的な学習をその効果や意義を踏まえて、実際の教育課程にどのように配置するかを考えることは、決して容易なことではないことも話題となった。現役の教員にもまして教員養成課程の学生たちは、このような課題をどのような場面で学ぶことができるのか。能動的・協働的な学習が表層的な形式としてではなく、意義や目的、効果の基礎を学ぶ場面をどのように設定するかは、今後重要な課題と考える。そこで、本稿では、大学の教員養成課程における新たな授業実践を題材に、今後の教員養成課程の学びについての一考察を行いたい。

#### 1. 教育改革の動向と教育現場への影響

2014年3月に示された『育成すべき資質・能力をふまえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—』では、学習指導要領の次期改定を念頭に、内容的な知識重視から、教科・科目を横断する汎用的な能力育成を重視した視点が示された<sup>2)</sup>。これらを踏まえて同年7月の文部科学大臣諮問では、「教員に求められる指導力を教員の専門性の中に位置づけること」「すべての教員がその指導力を身につけることができるようにすること」が求められ<sup>3)</sup>、さらに同年11月、中央教育審議会への文部科学大臣諮問『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』や12月に示された中教審答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』などに見られるように、「社会で活用できる能力・資質の開発」についての視点からの議論が進められている。特に次期学習指導要領にむけての議論が高大接続と合わせて

示されている点は、大学とそこにつながる高等学校の改革が焦点となっていることを示しているが、11月の文部科学大臣諮問の中で、学びの過程、方法の一つとして、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の手法に言及があった<sup>4)</sup>ことは、教育現場に一定の影響を持って受け止められた。

そもそも「アクティブ・ラーニング」の示す内容・定義には、多様なとらえ方が存在するが、本稿においては、深い理解につながる学習過程を意図して構成した、主体的な活動を伴う授業として提示することとする。

#### 2. 新しい教育動向に向き合う学生の授業経験

本稿の実践を行った授業において、学生に、自身が生徒としての立場であった時代を振り返って、能動的・協働的な授業の経験をどのように認識しているかについてアンケートをおこなった。その結果、「中学校時代に活動的な学習（討論、フィールドワーク、協働的な学習など）を行った経験を持つ」と応えた学生は半数以上に達したが、高校時代に同様の学習経験を記憶している学生は数人に過ぎなかった。学生たちの中の高等学校の授業イメージを集約すると、「知識の伝達」を「効率よく行う」という印象が強く、「（討論、フィールドワーク、協働的な学習などは）中学生にはできても、高校生には難しい」という反応が多かった。実際は高等学校の歴史諸科目はその教科内容や指導方法についても多様な実践が蓄積されている。しかし、アンケートからは、そのような授業を生徒として経験したと自覚している教員養成課程の学生は少数である。彼らの多くが学校現場で活躍する頃、社会的な要請として能動的・協働的な学習を取り入れた授業実践を求められても、彼らは自身の学習経験やイメージが希薄な中で、授業者として授業を立案・構想・実践を求められることとなる。

これらの問題点から、大学の教員養成課程の授業の中の教科専攻科目（歴史学）において、知識や理解を深め、考察過程を経た表現場面を交えた授業実践を試みた。その観点は次のとおりである。

\*東京学芸大学・東京学芸大学附属高等学校

- ア) 教員養成課程の中で、能動的・協働的な学習方法などについて、学生たちに実践的な経験の場の設定が必要である。
- イ) それらは方法論を学ぶことにとどまらず、自身が「学ぶ立場」としてどのような効果が自身の中に生じるのかを省察する機会が必要である。
- ウ) 能動的・協働的な学習方法が浅薄な行動自体が目的となることがないように、「学ぶ立場」としての経験を通じて目的・意義を正確に理解し、留意点に目が向く機会を作る必要がある。

以下の授業は、教育方法等を学習することが主たる目的ではない。卒業論文等を念頭に教科の専門科目を学ぶ上での知識や理解、研究方法の初期段階としての習得を目的としている。従って、学生が自身の学びへの影響や効果、あるいは留意点などと直接的に結びつけて振り返ることが比較的容易であり、学習効果という意識で省察することが可能であると考えた。

### 3. 授業実践

#### (1) 内容

以下、2014年後期、東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程社会科選修、中等教育教員養成課程社会科専攻を中心とする学生26名(第2学年19名、第3学年6名、第4学年1名)を対象とした「日本史研究」の授業概略を実践例として示した。内容は日本近世史の概要であるが、履修者の中には歴史教育、歴

史学を専攻としていない学生も多く含まれている。また、第2学年が中心であったため、専攻する学問の概説と研究前段としての視点の養成を意識し、日本の17～19世紀中期を大きく7つの時期で区分して、それぞれの時期の転換を表す典型的・具体的事象を取り上げて影響を考察するように設定した。

#### (2) 授業の方法・形態

授業では一般的ないわゆる「講義」的な方法も当然重要な要素である。それ以外に次のような様々な学習方法を配置した。

- ① 各授業で多様な教材(古文書史料、文献資料、映像資料、地図等)の提供
- ② フィールドワークやフィールドワークと連動したジグゾー学習法
- ③ 史料を事前に配布し基礎的知識の獲得をおこなった上で展開する反転学習
- ④ プレゼンテーションやその相互評価のためのルーブリック作成


#### (3) 授業概要

各回の授業の「主題」と「主となる問い」は表1に示した通りである。各回とも能動的な学習形態を一部に取り入れ展開したが、使用した資史料や具体的な題材、授業の展開は紙幅の都合から省略した。特に能動的・協働的な活動を主な展開としたものは、表2【A】～【D】に詳細を示した。

表1 授業概略と主題

回	タイトル	主題	各授業の主たる問い(評価対象)
1	(イントロダクション)「江戸と東京の景観の連続性」	16世紀と17世紀の江戸周辺の地形の変遷と現代の景観	現在の都市構造と近世の都市構造を地形的な変遷から比較し、その関係性を説明せよ。
2	(慶長期)「江戸から東京～江戸のインフラ整備を中心に～」	現在の都市構造と近世の都市構造の比較、産業・流通の変化と土地利用の変遷	汐留地区を例に、現代の再開発がどのような歴史的背景でおこなわれたのかを説明せよ。
3～5	フィールドワークⅠ「江戸城外堀を歩く」		表2【A】参照
6	(寛永期)近隣外交を考える～通信使外交から	日朝外交の背景と、外交官、朝鮮王朝、幕府、庶民、儒学者などそれぞれの立場の意識	現代の国際情勢をふまえ、国家間と民間双方の側面に留意しながら、近隣外交についてどのような意識が重要であると考えるか。
7	(元禄期)綱吉政権と元禄期前後の歴史的位置	時代像の描き方(多様な側面から何を選び時代を描くのか)	元禄期の歴史的意義について、自身の視点から研究史上の位置づけを調べよ。
8	(元文・享保期)玉川上水と近郊農村の開発(新田開発と近世における用水)	武蔵野新田の開発(江戸初期・寛永元禄期・18世紀前期)	時期、地域に留意して、武蔵野新田開発が必要とされた背景を説明せよ。
9～10	フィールドワークⅡ「玉川上水分水跡と現在の景観」		表2【B】参照
11	ジグゾー法を利用した成果の共有		表2【C】参照
12	ルーブリック作成と相互評価		
13	(宝暦・天明期)経済の変化と社会	江戸の消費拡大と周辺の経済的変貌	宝暦・天明期の歴史的な画期を何に求めて説明すべきか。
14	(文化・文政～幕末)江戸後期の社会の変容	文化文政期の社会状況と豪農層のネットワーク	18世紀における豪農層の歴史的な役割はどのようなものだったのかを説明せよ。
15	(反転学習)(慶応～明治)歴史的事象をどのような視点で分析するのか(大学周辺の古文書から考える幕末維新「武州直し一揆」を事例に)		表2【D】参照

表2 能動的・協働的な活動を主な展開とした授業部分(表1【 】部分)

<p>【A】</p>	<p>フィールドワークⅠ 江戸城外堀を歩く「近世都市江戸と東京の連続性～都心部」</p> <p>&lt;コース概略&gt;溜池と口枝神社(景観、地形)→霞ヶ関(江戸時代と現在の土地利用の関連)→江戸の石垣と説明展示見学(虎ノ門駅構内)→国会周辺(水準原点-井伊邸跡)→丸の内(江戸時代と現在の土地利用、将門首塚)→江戸城天守跡(皇居東御苑)→北の丸→小石川橋(神田川の水運、鉄道、上水と現代の景観)→日本橋周辺(江戸と現在の土地利用の関連)→東京駅</p> <p>&lt;事前課題&gt; 5グループに分かれ、それぞれ以下のテーマについてスライド6枚(A4一枚)のまとめを準備。当日、テーマに関連の深い場所で担当のグループが説明を実施。</p> <p>「霞ヶ関近辺の景観と大名屋敷の関係」  「江戸城の構造と江戸の町割り」  「運河、堀の構造と現代の役割」  「神田～日本橋の現在と過去の町並みの関係」  「現代の東京のアイデンティティーにおける「江戸」の利用」</p>  <p>写真1 虎ノ門駅での江戸城石垣の観察と解説展示の見学</p> <p>&lt;事後課題&gt; フィールドワークによって得たことがらをスライド6枚(A4一枚)にまとめ、事前課題とあわせて提出。</p>
<p>【B】</p>	<p>フィールドワークⅡ 小金井・小平市の玉川上水分水と新田村落</p> <p>&lt;方法、目的&gt; 玉川上水分から分水された用水の形跡を分担してたどり、新田村落の景観を理解するとともに、現代の景観を比較して、その連続性や開発への影響などを考察。この地域は玉川上水と平行して、西から東に数筋の分水が作られていた場所。分担してそれらの分水を調査。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分水関が築かれている付近で、地元の郷土史に詳しい方を外部講師として招聘。戦後の生活と用水、現代との景観の関係、大沼田分水、鈴木稻荷周辺などの説明案内と解説。</li> </ul> <p>&lt;コース概略&gt; 5つのグループに分かれ、それぞれ担当の地域を調査(小金井市、小平市)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・喜平橋周辺(玉川上水からの直接分水関。その後枝分かれして各用水に分水される)</li> <li>・石神井川周辺(自然の湧水により流れが形成している場所)</li> <li>・田無用水流域(比較的遠距離に向かっており、且つ途中でさらに分水している用水)</li> <li>・鈴木用水北川流域と南側流域(街道の両側に引かれた用水)</li> </ul> <p>→用水分水沿いに景観や状況などをおよそ4～5km調査し、下流の駅に集合して解散。</p>  <p>写真2 地域の方からの解説</p>  <p>写真3 分水調査</p>
<p>【C】</p>	<p>知識構成型ジグソー法とルーブリック検討作業を利用した、自身の学習の目標と水準を認識できる力の育成</p> <p>&lt;課題1&gt; フィールドワークⅡの「調査グループ」での成果の収集資料の整理(グループ内での共有)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループで収集した資料や写真などを整理し、12枚程度の写真(A4二枚程度に集約)を選択し、視点を明示して解説を付け、まとめを作成。</li> </ul> <p>&lt;課題2&gt; 新たに編成した「分析グループ」によるプレゼンテーション作成(全員の共有と分析視点の育成)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの「調査グループ」から基本的に各一人ずつ参加する新たな「分析グループ」を5つ編成し、それぞれのテーマでデータを分析。 <ol style="list-style-type: none"> <li>① それぞれが自分の担当した調査場所の資料を持参し、新しいグループでお互いに調査結果を報告・共有し、全てのデータを集約。</li> <li>② 全ての調査結果を用いて、新しい研究グループで協議し、地域の歴史の変遷と景観を分析するテーマを設定し、プレゼンテーションを作成。</li> </ol> </li> </ul>

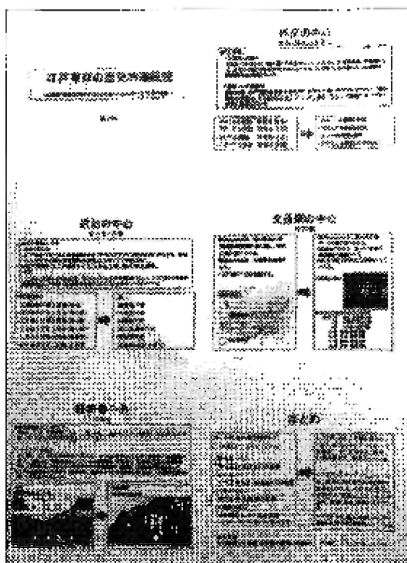
	<p>&lt;課題3&gt; 簡易ループリック作成と相互評価          プレゼンテーションの前に、それぞれの発表の相互評価の準備のため、評価規準を各グループ内で協議をしながら、簡易ループリックを作成。</p> <p>① ループリックの項目          (1) テーマの設定について (2) 報告の展開について (3) 報告の妥当性について          それぞれ4つの評価段階を設定し、グループで協議しながら文章でその基準を表す。</p> <p>② 自らの作成したループリックを参考に、自班のプレゼンテーションを修正。</p> <p>③ 各グループの研究発表の報告を実施。</p> <p>④ 相互評価(評価は個人で行う)</p>
	<p>(反転学習を利用した学習) 歴史的な事象をどのような視点で分析するのか(大学周辺地域の古文書から考える幕末維新…「武州世直し一揆」を事例に)</p>
	<p>&lt;主題&gt; 研究的視点の育成と専門の研究史を整理する際の意義の理解。</p>
	<p>&lt;主となる問い&gt; 提示された共通の史料について、自分はどのような視点から何に注目し、どのような課題を設定するのか。</p>
	<p>&lt;教材&gt; 地方文書(武蔵野市史資料編所収)、武州一揆についての研究史と研究視点の例示(授業者作成資料)</p>
	<p>&lt;事前準備と事前課題&gt; (前回の講義の際に、資料配付と課題を提示)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(配付資料) 大学周辺(国分寺市)の村役人の残した資料              (内藤新田神山平左衛門「むさし野の涙」より一部抜粋。慶応二年武州世直し一揆についての経緯、村内状況、客観的経済情勢など、村役人が自らの原因分析の見解等を示した回顧録。[武蔵野市史資料編]所収。刊本、活字)</li> <li>・(事前課題) 「史料から事件の経緯を解説し、自分の最も注目すべき部分を抽出してA4一枚でレポート。」</li> </ul>
<p>[D]</p>	<p>&lt;授業の展開&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提出されたレポートから資料の特徴と注目点を確認</li> <li>・研究史の整理(世直し及び維新史研究から)</li> <li>● 同じ史料の読み込みから、複数の視点による整理、論点の提示             <ul style="list-style-type: none"> <li>・&lt;視点1&gt; 事件概要から(一揆の目標: 横浜襲撃)</li> <li>・&lt;視点2&gt; 経済的社会的状況から(インフレ、養蚕と地域状況)</li> <li>・&lt;視点3&gt; 事件の時系列経緯から(地域の対応、豪農の行動、農兵隊による鎮圧)</li> <li>・&lt;視点4&gt; 村内状況から(村役人層と小前層の認識)</li> <li>・&lt;視点5&gt; 有力農民層の動向から(新しい時代への対応)</li> </ul> </li> </ul>
	<p>&lt;研究史の再整理と研究視点の考察&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究史の整理を再確認し、自分はどのような視点から研究史をまとめるべきかを考察。同時に、この資料を題材としたとき、自分はどの事象に注目し、どのような視点から分析をおこなうかを考察させる。</li> </ul>

(4) 成果物等からの分析

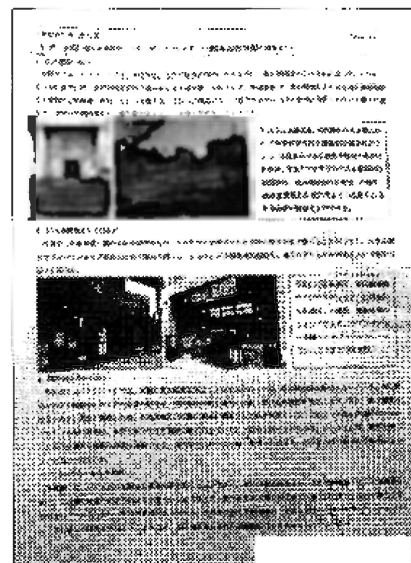
これらの学習の過程について、表2「能動的・協働的な活動を主な展開とした授業部分」の中での成果物等から分析を試みる。

① フィールドワークIの成果物から

フィールドワークIでは、フィールドワークの実施の前後に事前調査と、事後の活動評価の提出を課した(表2 [A] <事前課題><事後課題>を参照)。



資料1 フィールドワーク当日現地での発表レジюме



資料2 事後にレジюмеに手を加えた部分

資料1および資料2は「現代の東京のアイデンティティーにおける『江戸』の利用」というテーマでの作成を担当したグループの提出物である。事前準備として調査を行い作成された資料1は、旧大名屋敷がどう利用されているかという知識的な整理の範疇で現在の東京の政治・外交・交通・経済などとの関わりを示している。一方、実際のフィールド

ワークを経て作成された資料2は、水準原点や桜田門など異なる時代の景観の併存や、各県のアンテナショップが連なる現状と江戸時代の経済との関係等も含めて空間認識との関わりから広く課題を捉え直すことができしており、時代を通じた関係性を見出す視点が大きく広がっている。

② フィールドワークⅡの事後成果についての簡易ルーブリック作成の作業から



写真4 グループワークによるフィールドワークの成果共有作業の様子 (2015年1月13日 筆者撮影)



写真5 同 報告発表の様子 (2015年1月27日 筆者撮影)

表2【C】部分の実践では、その成果のまとめと発表に際して、各グループで簡易ルーブリック（評価表）を作成した（表2【C】<課題3>を参照）。

当初、学生にプレゼンテーションなどの表現が伴う活動の成果や、論述などの評価の方法についてその観点を尋ねたところ、「正しいか」「わかりやすいか」「工夫されているか」などの観点にとどまり、特に内容の評価については、情報量が「正確か不正確か」、「多いか少ないか」にのみ観点が集中していた。そこで、評価の観点を意識させ、同時に自身のプレゼンテーション作成時の到達度を想定するために、ルーブリックの作成を試みた。多くの学生にとってはルーブリックを用いる評価は初めてであったため、3項目4段階の簡易な形式での作成とした。例えば「テーマの設定」の評価について、4

段階目に「実習当日の観察項」の中から視点を抽出し、それらについての研究史上のテーマを理解した上でテーマを設定している」という文面を事前に記入した評価作成シートを配布し、その他の段階をグループで協議しながら作成することとした。資料3の評価表のグループでは、記入された4段階目の評価の上部段階として、「研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている」と記入し、評価の段階差として、以後の学習に転化する要素が含まれているかどうかを示した。このように評価を分析的に話し合った後、あらためて自分たちが作成した発表資料を再度確認し修正を行う作業を行ったところ（資料4）、発表資料自体の水準も変化が見られた。

資料3 グループで話し合い作成した簡易ルーブリック

評価項目	評価基準	評価段階	評価結果
1. テーマの設定	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている	4	A
2. 観察項の抽出	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている	3	B
3. 発表資料の作成	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている	4	A
4. 発表資料の発表	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている	4	B

資料3 グループで話し合い作成した簡易ルーブリック

資料4 作成したルーブリックに基づき個人で行う簡易評価

評価項目	評価基準	評価段階	評価結果	総合評価 (A B C D)	備考
1. テーマの設定	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている	4	5	A	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている
2. 観察項の抽出	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている	3	3	B	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている
3. 発表資料の作成	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている	4	5	A	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている
4. 発表資料の発表	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている	4	3	B	研究上の内容を理解した上で、実習内容に沿った内容設定で、以後の学習に役立つものとなっている

資料4 作成したルーブリックに基づき個人で行う簡易評価

#### 4. 学生アンケートの分析

授業終了後、受講学生に二種類のアンケートを実施した。一つは、講義内容に沿って授業者が作成したもの、一つは東京学芸大学FD・SD推進本部<sup>5)</sup>が作成した本学共通の定型アンケートである(表3参照)。以下、本稿に關係する三つの質問を取り上げ、分析を試みる。

〔質問番号7〕 専門研究との關係について「2回のフィールドワークを自身の研究等と結びつけて考えた場合、そこで生かせる意義は何だと思えますか。」  
〔質問番号8〕 能動的な学習方法について「講義形式と比較して感じた利点と、反対に留意すべき点はあるような点であると思えますか。学習する立場として感じたことを記入してください。」  
〔質問番号9〕 今後の専門研究への視点「自分が今後、研究テーマを設定する際に、今回の講義を通じて参考になった点があったら記入してください。」

##### (1) フィールドワークと専門研究の關係について …〔質問番号7〕

解答は、以下のような傾向に分類された。

##### ア) フィールドワーク自体の有用性について言及するもの

「史料や文献・論文を読んで考察することも重要だが、実際に見て触れて感じることも大切な要素であると確認でき、これからの研究などにつなげていきたいと思えた」など。

##### イ) 自身の学習における視角・視点の広がりとのつながりに言及するもの

「フィールドワークを行うと、歴史的なつながりだけでなく、地理的・地誌的視点からも広くアプローチできる点」「一つのことを説明するのも、視点を変えれば、いくらでも解説ができることがわかったので、『教える』にあたって準備が大切だということを感じた」「ある地域の歴史を調べるとき、視点はいくらでもあり、一つの視点を深く掘り下げると見えてくるものがあるということ」など。

フィールドワーク自体の意義や楽しさはアンケートからもほぼすべての学生が自覚していたが、「分析の視点」の広がりについて指摘する学生が多く見られた。同じ地域の分析を協働的に行う中で、多様な分析視覚が抽出されることが言及されている。また、「授業を行う立場」に自身を置き換え、そのような視点の広がりを前提とした活動における授業者の準備の大切さに言及している学生も見受けられた。

##### (2) 能動的・協働的な学習方法について

##### ① 学習者として何を感じたか …〔質問番号8〕 能動的・協働的な学習方法については、学生自身が

感じた利点・有用性(上欄)、留意点(下欄)を示してもらった。

##### 〔利点・有用性〕

##### ア) 講義への関心や意欲の高まりについて

「楽しい」「主体的に取り組む」「積極的に参加する」「学習を深めようという姿勢が生まれた」「高い意欲を持って臨む」など。

##### イ) 知識の確実な獲得への効果について

「講義形式だと自分が考えることが少ない」「自身の思考が活性化された」「印象が強い」など。

##### ウ) 見通しや振り返りによる学習のサイクルに結びつく効果について

「研究のノウハウを知ることができた」「自分でやることで経験と反省が生まれる」など。

##### 〔留意点〕

##### エ) 事前の準備の指示や内容量の程度、説明の明確さの重要性について

「十分な説明が行われないと、学生側はスムーズに授業に入れない点」「事前に講義内容を予習しておくことは大切」「事前の情報提示の程度」「課題がなかなか大変」など。

##### オ) 学生の多様な視点を制約せずに、共通の理解を作る授業者の説明方法の工夫について

「説明が少々曖昧でやりにくいこともありました」「知識が全くないものに関して非常に取っつきにくい」「課題内容を理解するまで時間がかかったりした」など。

##### カ) 一つのテーマに対しての時間設定と内容の焦点化について

「ある程度時間をとられてしまう」「一つの事象を扱うのに時間がかかり、多くのテーマを設定することができないので、テーマ設定は留意すべき」「時間が足りてない感じだった」など。

##### キ) 知識量とのバランスと、授業者と学生の内容や方法に対する合意の必要性について

「課題内容を理解するまで時間がかかったりしたので、学べる総知識量は少なかった」「授業で得られる知識が、講義形式の方が多いかと感じた」など。

##### ク) 協働的な学習への関心の差をどれだけ少なくするか、授業者と学生の授業方針・参加姿勢などの合意の重要性について

「習得する知識の個人差が大きい」「知らない人どうしが多い大学の講義では難しい面があると感じた」など。

以上から、授業者が一定の視点で説明を進めていく講義形式と比較して、学習の視点を学習者間で紡ぎ出す学習方法は、時間的な制約が課題となる。授業における時間的な制約についての実感や、取り上

げる題材についての吟味が必要であることを実感として気づいた学生が多く見られた。そのために授業者は、獲得した成果を他の内容や考察に汎用的に転移できる題材を選択・吟味する必要があるが、学習者もその点を共通に理解した上で実施することが重要である。その部分の共有が不十分であるために、講義による知識獲得量との比較から不安を感じる学生も現れたと考えられる。

## ② 学習方法論からの専門研究への影響 … [質問番号9]

授業内容や方法が、自分の今後の研究等に向けてどのような影響があったのかについては、以下のような傾向に分類された。

### ア) 対象についての視点を、多角的に広く持つことの有用性について

「視点を一つに限定するのではなく、複数あった方が研究の幅が広がるということ」「様々な視点で資料を読むことで、一つの有名な史料をより多角的な視点で見ることができるようになった点」「一つのテーマにおいて多くの視点がある」「多角的視点、先行研究の視点にとらわれない」「一つのテーマに対しても多くの視点があることや、事柄の背景を気にするようになった」など。

### イ) 視点の多様性を踏まえた上での研究史の整理の重要性について

「研究史、当時の時代背景を考えること」「研究史の整理、研究上の位置づけ」など。

第15回の授業内容が大きく影響していると考えられるが、自身の史料解釈の関心や視点を他者と比較し合うことによって、多角的な視点の広がりを自覚した

学生が多く見受けられた。これは本項「(1) フィールドワークと専門研究の関係について」において示した、作業を通じて協働的に学んだ成果と共通する点が見受けられる。自身の視点を客観的に認識し、視点の相対化を強く意識することが可能となっている。この学びが、専門科目の研究動向の整理についての視角に転移できていると考えられる。

## 5. 考察, 課題

以下、実践からの今後に向けての確認点と課題を示したい。

(1) 能動的・協働的な学習形態は、授業後に自らの活動を他者の意見も交えて振り返ることや、適切な基準を自ら考察すること、その基準で自身の構成した知識や概念が妥当であるかの確認を繰り返すことで、深まると考えられる。特に教員養成系の学生にとっては、将来授業を担当する立場として、能動的・協働的な学習で生じる楽しさや参画意識を生かしつつ、本来目的とされるその授業、単元の学習の意義を深める授業を構築する力の育成につながるものと考えられる。

(2) 能動的・協働的な学習方法の実践に際しては、「学習者として感じたこと」や「気づき」が、授業者となった際に重要である。理論・方法論と併せて、自身の専門性の学びの中に「経験」として設定することで、効果や限界、留意点などを自身の学びから省察することができると考える。この経験を踏まえて彼らが学習者から授業者に立場を変えたとき、新しい学習方法の実践を求められる環境下で、学習の本来の目的に対して効果的なものとして利用できると期待する。

## 註

- 1) 本大会当日に報告した高等学校における実践については、2014年6月に開催された東京学芸大学史学会大会において行った報告とあわせて「歴史教育に求められているもの - 他教科・科目との連携や多様な資料を用いた実践と『能力・資質』への問いかけ -」(『史海』第62号東京学芸大学史学会 2015年5月)に記した。参照いただきたい。
- 2) 「従来の学習指導要領は、児童生徒にどのような資質・能力を身に付けさせるかという視点よりも、各教科等においてどのような内容を教えるかを中心とした構造」「そのために、学習を通じて『何ができるようになったか』よりも、『知識として何を知ったか』が重視されがちとなり、また、各教科等を横断する汎用的な能力の育成を意識した取り組みも不十分と指摘されている」(『育成すべき資質・能力をふまえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—』2014年3月)

- 3) 2014年7月 諮問『これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について』。
- 4) 2014年11月、中央教育審議会への文部科学大臣諮問の中で「学びの量と共に、質や深まりが重要であり、子どもたちが『どのように学ぶか』に焦点」が示され、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の導入について触れたことから、方法論の研究会や研修も増加した。中等教育における実践についても、都道府県教育委員会と大学研究室との連携による実践例など、組織的に教育課程に位置づけていこうとする取り組みも見られるようになった。一方で、表層的な理解によって、形式的な実践が先行してしまう懸念も生じている。
- 5) 東京学芸大学の教育機能の質的向上に向けた全学的な支援施策の企画・立案及び教職員のFD(ファカルティ・ディベロップメント)・SD(スタッフ・ディベロップメント)活動推進に向けた支援のために設置された機関のことをさす。

表3 学生 (20名: A~T) に授業最終日に実施したアンケートの回答一覧

カテゴリー	質問内容	学生A	学生B	学生C	学生D	学生E	学生F	学生G	学生H	学生I	
フィールドワークI (東京都心部の景観と歴史の変遷)	1 自分が解説すると想定した場合、最も興味を持った場所はどこですか	東京中心部と外堀内堀の関係性	現在の皇居周辺の、過去から現在への土地利用の変化について	日本橋		神田川	堀、皇居	元井伊邸		越後屋呉服店(三越デパート)	
	2 事前のまとめを作ったことは、当日の自分に効果があったと感じていますか	5. 非常にあった...30% 4. あった...60% 3. ふつう...5% 2. あまり...0% 1. 全くない...0% 無回答・無効...5%									
	3 フィールドワークを行ってみて楽しさ、興味を感じましたか	5. 非常にあった...50% 4. あった...50% 3. ふつう...0% 2. あまり...0% 1. 全くない...0% 無回答・無効...0%									
	4 自分にとって、フィールドワークでの意外な気づきはどのようなことでしたか	図や話だけではわからない自分の視覚を使って理解しようとするところ。	普段何気なく見たり聞いたりしている土地が歴史的な視点から見ると、変わったものに見えるようになった。	政治の中心地である江戸城、経済の中心地である日本橋が近かったこと。	身近に歴史を感じた。	地下鉄の駅に展示があるなど、身近に歴史を学ぶことができること。	観光とはまた違った楽しみや視点があったこと。	地形などの地理的なことが、昔の国の最重要機密であったこと。	留学で学んだことを実際にフィールドワークで学ぶことにより、それがより印象づけられたこと。 ・江戸末期と現在の比較において、現在の発展は適当なものではなく、歴史的な要因があること。	意外にも昔(江戸期)の名残があったということ。	
フィールドワークII (小金井市・小平市の玉川上水分水の現状の景観と開発)	5 フィールドワークを行ってみて楽しさ、興味を感じましたか	5. 非常にあった...15% 4. あった...70% 3. ふつう...0% 2. あまり...0% 1. 全くない...0% 無回答・無効...5%									
	6 具体的にどのような点ですか	用水路は普段は目にしていたが調べることがなかったため。		身近な地域をいくつか見ることができた点。	町の構造など。	小平の用水から土地の利用しながら学習できた。	自分の通う学校の歴史・地理を学ぶことができた点。	身の回りにある地構が意外なところにあったこと。	実際に住んでいる地域を道路が直線ではなく変に曲がっていたり、斜めに入っていたりなど、考えと不思議な点が多い理由が説明できた点。	分水が今、どのような形で残り、利用されているか気づけた。	
	7 2回のフィールドワークを自身の研究等と結びつけて考えた場合、そこで生かせる意義は何だと思いますか	現地に行かないとわからないこと(例えば石碑に書いてある文章とか)がたくさんあるということ。	私は日本中世史を専攻していますが、同様のフィールドワークで実際に歩いてみるということが多くあるということを学んだ。	実際に見ることができた。現地調査をすることは研究の性質上ないかもしれないが、実際に資料に当たることが大切にしていきたいと思った。	まだわからない	当時の人びとの生活を知ることができた。	史料や文献・論文を読んで考察することも重要だが、実際に現場で触れて感じることも大切な要素であることと確認でき、これからの研究などに生かしていきたいと思えた。	地形の形成には地理的な要素も多分に含まれ、単に政治・経済的な権力だけではないという意識。	歴史は実際にその土地で行われた物であり、地理的に見て、人間の見ても、不可能なことは意外とフィールドワークを行わないとわからないことがあるので、その点を生かせると感じた。	実際に歩くことでその場所の地割りであったり、どういった名が多いのかなどを気づくことができるので、そこから新しい疑問が生み出せるという意識。	
学修(学習)方法論について	8 今回はあえて講義形式を少なくし、ジグソー法、ルーブリック評価、反転学習など、基礎的な資料活用スキルを中心に構成しました。学修する立場として感じたことを記入してください。(上欄...利点・有用性、下欄...留意点)	自分としては講義形式をするメリットはあまりないと思っているので、この授業のやり方を継続してほしい。	一般的な講義形式よりも、学ぶ側がより主体的に取り組むことができる点が多かった。	積極的に授業に参加することができたと感じる。	思考、表現が多く、より学習を深めようという姿勢が生まれたので、そこは授業形式と比べてよかったと思います。	講義形式だと自分自身が考えることが少なかった。	講義形式よりも高い学習意欲を持って授業に臨むことができた。	将来の教師として使える技術が身についた。	印象が強くなるのでよかった。	資料活用の技能は、「暗記」と思われている社会科にとっては新しい視点であると思われた。	
	9 今後の専門研究への視点	視点を一つに限定するのではなく、複数あった方が研究の幅が広がるということ。	十分な説明が行われないと、学生側はスムーズに授業に入れない点には留意する必要がある。	事前に講義内容を予習しておくことは大切だと思った。	特になし。		調査などにある程度時間をとられてしまっている。	説明が少々曖昧でやり取りもありませんでした。	体力面や遠方だと経済面が大変になるので、今回くらいの方がいいと思います。	様々な視点で資料を読むことで、一つの有名な史料をより多角的な視点で見ることができるようになった点。	
全体的な意見、感想	10 その他 感想、意見など	社会科系の授業の中で一番おもしろかった。		今まで受けてきた日本史の授業、講義の中で一番楽しかったです。自分の知識不足で講義の内容を他と関連させて学修することはできなかったけど、それでも、いろいろな視点から事柄を見ることの大切さを学びたいので、今後につなげていきたいと思っています。	半年間ありがとうございました。フィールドワークとても楽しかったです。					社会学専攻でしたが、資料の読み方など、他専攻の人間にもわかりやすい内容だったと思う。	

		(数値は%)					平均
		5. とてもそう思う	4. そう思う	3. ふつう	2. あまり	1. わからない	
大学FD,SD 推進本部による 共通授業アンケート	2 授業の目標に応じた知識や能力が身についた。	33.3	61.1	0	0	5.6	4.17
	3 毎回の授業の目標は明確だった。	44.4	55.6	0	0	0	4.44
	4 授業の進む早さは適切だった。	23.5	70.6	5.9	0	0	4.18
	5 話し方や板書などの授業の方法は適切だった。	35.4	64.7	0	0	0	4.35
	8 予習・復習レポート等に充てた時間は、1回の授業に対してどの程度でしたか。	4時間以上...6.3	2~4時間...12.5	1~2...50.0	1時間未満...18.8	なし...12.5	
9 この授業内容について自ら学習する意欲が高まった	29.6	64.7	0	0	5.9	4.17	



学生J	学生K	学生L	学生M	学生N	学生O	学生P	学生Q	学生R	学生S	学生T
水俣原点(井伊藩邸跡)	江戸城	皇居前広場(旧大名武家屋敷地跡)	皇居前割の門について(例えば半蔵門)成り立ち、名前の由来について	井伊家と水俣点	江戸城周辺の立地	日本橋の地割	江戸城跡、日本橋	日本橋周辺の神田などの町並	水道橋、日本橋	江戸城周辺(特に大名屋敷の様々なレイアウト)

現代の土地利用と近世のつながり	今までとは全く違う視点から見る事ができたこと。	事前調査を含めて、今の官庁がなんにもまきれいに並んでいることに驚きを感じた。	街は、人の手によって作られたものであり、土地が広がったこと、官庁が建てられたこと。	地図ではなく、実際に足を運ぶことにより、大きさ、状況の見え方がわかる。広げられた土地や江戸城周辺の区画)	昔から現在への変化や残されているところを歴史的視点から見られた。	意外と江戸の様子が残っていたこと。	実際に見たり、歩いたりしたところから、ただでいいからなかつたことも気づけた。	すべて残っているわけではないが、当時の地割りが現在も生きていること。大名屋敷が行政の省庁の建物になっていることなど。	江戸城の堀と土地利用	調べるよりも、自分で知っているものから考えようとした。
-----------------	-------------------------	--	---	--	----------------------------------	-------------------	--	--	------------	-----------------------------

用水の利用方法を見ることで現代の景観や都市政策の位置づけと、近世における意義が感じられた。	土地と用水のつながりを見ることができた。	普段、通っているだけではないが、気づかないような用水路が今も存在していること。	身近な地域に過去の遺構が残っている点。	今、生活している周辺に、江戸の名残があったこと。今回の学習で、初めて、自分の住居の裏にあるものが用水の跡であることに気づいた。	水利用や関係する地域を直接見てきたこと。	自分たちの住む地域をこの歴史をたどるという視点で見てきたこと。	普段生活している場所をフィールドワークすることで、より身近に感じた。	学校の近くに住んでいないので、なかなか玉川上水や用水について知ることができなかったが、深められた。	上水の昔と今の姿が少しも「見えなくなった」ように感じた。	東京の発展の役割として重要な役割を知ることができた。地理的・地誌的視点からも広くアプローチできる点。
---	----------------------	---	---------------------	---	----------------------	---------------------------------	------------------------------------	---	------------------------------	--

	行動力がつく身につく(笑)それ知識が無駄にならないこと。	研究の対象と先行文獻や先行研究のみならず、自ら対象地を訪れて、自分の目で見てみる大切だと学んだ。	一つのことを説明するのではなく、視点を変えれば、いくつでも解釈ができることがわかった。「教える」にあって準備が大切だと学んだ。	日本古代史の面白さ、日本古代の社会史に目を向ける必要性は大きい。	実際に目で見てわかること、見えないところから発見できる点もある。	ある地域を調べるには、資料だけでなく、実際に現場に行き、目で見てみる必要があること。	資料だけでなく、学校のネットワークや関係者について考えるきっかけになった。	何より「自分の足で歩いた」リアルな感覚。	フィールドワークを行うと、歴史的なだけでなく、地理的・地誌的視点からも広くアプローチできる点。
--	------------------------------	--	---	----------------------------------	----------------------------------	--	---------------------------------------	----------------------	---

今後卒論を書いていくが、その概略を行ったことが多く、卒論が書きやすくなった。卒論だけでなく研究のノウハウを知ることができた。また楽しく学べたことが、今後楽しい授業を作ると考えた。	利点…受身ではなく主体的に学ぶことができる。	講義形式よりも実践的な授業が学べたこと。	利点は、子供が参加できる点。	主体的な活動、そして現場で生徒へ行う際の事前段階として実体験できてよかった。*聞くだけでなく、自ら相手を、自分の観点で評価したり、積極的に活動できた。	様々な形式で行ったことで、それ楽しめられた点があった。*自ら相手を、自分の観点で評価したり、積極的に活動できた。	利点…主体的な学習を基礎として、自分ができる。*事前情報程度、課題がなかなか大変。	利点…自主的な参加型の授業	授業として教科書などを用いて学習したことはあったが、実際に活用したことはなかった。	個人的には現在の研究史を踏まえて先生の話がすくなく、入ってくる感じが良かった。*専門ではないが、あまり興味がない人にとっては体験的な活動が多い方がいいのかなと思った。	利点…自分自身で経験と反省が生まれる点。
---	------------------------	----------------------	----------------	---	--	---	---------------	---	---	----------------------

今回はテーマ設定がよかったと思うが、一つの事象を扱うのに時間が掛かり、多くのテーマを設定することができないので、テーマ設定は留意すべき点だと思う。	留意点…知識が全くなかったものについて非常に取っつきにくい。	私たちが課題内容を理解するまで時間がかかりました。*学べる総知識量は少なかったと思う。	対して7回の授業で得られる知識が、講義形式の方が多いかと思えた。		時間が足りなかった。	留意点…やらなければならないテストなどで管理する知識の個人差が大きい。		やや課題が多く負担だった。グループ活動は知らない人同士が多い大学の講義では難しい面があると感じた。	留意すべき点…特に感じなかった。
---	--------------------------------	---	----------------------------------	--	------------	-------------------------------------	--	---	------------------

研究史の整理、研究上の位置づけ	一つのテーマにおいて多くの視点がある	史料にまず目を通すこと。現場に行ってみる。	視点を見つけて出すことが大切だと思った。	多角的視点、先行研究の視点にとらわれない。	教科書視点以外からも考えることができたので、テーマを考へる上で役に立った。	水、地割りと関わりが深いものから歴史を学ぶこと。	研究史、当時の時代背景を考慮すること。	一つのテーマに対して多くの視点があることや、事柄の背景を気にするようになった。	研究史のまとめの意義	広くアプローチする態度。
-----------------	--------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------	---------------------------------------	--------------------------	---------------------	---	------------	--------------

	楽しかったです!	レベルの高い授業で、大変でした。	近世は自身勉強の薄分野であり、また社会変革が大きいこと、現代につながる画期であること、大いに授業が参考になった。*子供(生徒)の興味を引きつけ、導入部、質疑の参考になるような情報が多く、感謝しています。	半年間ありがとうございました。今期一番楽しかったです。	フィールドワーク楽しかったです。	映像、プリントを使った、江戸の醤油についてや遺信使の授業が初めて知ったこともあって楽しかったです。		近世史をやっている自分にとっては、とても興味がありました。高校時代、こんな日本史を受けていたらなあと思つた。先生みたいな歴史の先生になりたいです。	正直、一番楽しかった授業でした。知らないことばかりだったので、先生みたいな歴史の先生になりたいです。
--	----------	------------------	---	-----------------------------	------------------	---	--	---	--

※ アンケートは授業選択者(26名)のうち、欠席(公欠を含む)を除いた20名の結果である。